

再会

イミテーション

ラヴアーズ

武藤 啓右

人物

足立奈緒 (24) 家事手伝い

尾高拓也 (25) 奈緒の元カレ

店員 A (24) カフェ店員

店員 B (45) 質屋店員

○カフェ・外観

ガラス張りのお洒落な店構え。

○同・店内

窓際席で向かい合って座る足立奈緒 (24)
と尾高拓也 (25)。

奈緒の首元にはネックレス。奈緒は気
まずそうな表情。拓也は仏頂面で腕組
みしている。

奈緒「……元気そうだね、たつくん」

拓也、答えずに奈緒を睨む。

奈緒「……新しいお仕事決まったって、本当？

何のお仕事かな」

拓也、答えずに奈緒を睨む。

奈緒「あ、今日そんな話じゃないよね……」

拓也、わざとらしく大きなため息。

奈緒「たつくん、ホントごめんね。出来心だ
ったの。私どうかしてた。たつくんがいる
のに浮気するなんて、最低だよね」

奈緒、ハンカチで鼻を押さえながら、

奈緒「私ね、本当に反省してるの。たっくん
の事傷つけちゃったって気づいてから、毎
日凄く辛くて……涙が……」

顔を伏せ、泣きむせぶ奈緒。

巨大なパフェを持った店員Aが来て、

店員A「ジャンボチョコパフェのお客様……」

奈緒「(片手を挙げ)……私です」

店員A、奈緒の前にパフェを置く。

店員A「ごゆっくりどうぞ」

立ち去る店員A。奈緒、食べながら、

奈緒「でもたっくん……本当にごめんね。私、

悪いところあったら……ちゃんと直すから」

拓也「そういうとこだよ」

奈緒「え？」

拓也「え、じゃないんだよ！いいか奈緒。何

で別れ話の時にパフェ頼むんだよ。しかも

お前からこの店指定してきやがって」

奈緒「たっくん聞いて。ここね、パフェが凄

い美味しいの。TVとかでも紹介されてて」

拓也「俺んち埼玉だぞ。なんで表参道まで出

てこなきやいけないんだよ」

奈緒、再びパフェを食べながら、

奈緒「ごめんねたつくん……私、この後近くの美容院予約してて……で、その後高校の同級生とマッサージ行って……夜は、この近くにあるミッシュランに載ったレストラ
ンでご飯食べるの」

拓也「最高の一日じゃねえかよ。俺との別れ話の濃度が薄まりまくるんだよ！」

奈緒、パフェを食べながら、

奈緒「たつくん、私本当に悪いと思って……」
拓也「謝りながらパフェを喰うな！」

パフェを急いでかき込む奈緒。飲み込んで一息ついてから、

奈緒「もうさ、許して貰うの無理だと思うから、最後に一個だけお願いしてもいいかな」

奈緒、首元のネックレスを見つめ、

奈緒「誕生日にたつくんがくれた、ティファニーのネックレス。別れても、大事につけてていいかな。だってこれ、二人が愛し合

った証じゃん」

拓也「…好きにしろよ」

奈緒「ありがとう…：たつくん。私、たつくんと過ごした日々の事、絶対に忘れない」

拓也「俺だって忘れねえよ。奈緒と過ごした時間は、俺にとっても最高の…：」

奈緒、腕時計を見て立ち上がる。

奈緒「あ、ボチボチ美容院の時間だから行くね。たつくん、新しいお仕事頑張ってるね」

拓也「なんだお前！」

○商店街

肩からバッグを提げ歩く奈緒。首元に

はネックレス。振動音が鳴り、バッグ

からスマホを取り出し耳に当てる奈緒。

奈緒「もしもし絵里？どした？あ、先月の表

参道最高だったね。うん…：グアム？あく、行きたいけど今あんまお金ないかも。うん」

○お宝買い取りストア・外観

大きな看板に店名と『貴金属・ブランド物買取』と表示。入口前の立て看板に『ティファニー高価買取中』の文字。

店前を奈緒が電話しながら通り過ぎる。

奈緒「今回パス。誰か他の子誘って……」

店前に戻ってくる奈緒。スマホを耳に当てたまま立て看板を間近で凝視する。

奈緒「また電話する」

○同・店内

入ってくる奈緒。ガラスケース越しに

立つ店員B (43)が、

店員B「いらっしやいませ」

奈緒「あの、査定お願いしたいんですけど」

奈緒、首元のネックレスを見せる。

奈緒「ティファニーなんですけど。家にケースもあるんで。それ込みの値段知りたくて」

店員B「かしこまりました。査定担当の者呼んで参りますので、少々お待ち下さい」

店の奥に立ち去る店員B。

バッグからスマホを出し電話をかける
奈緒。ガラスケースに背を向け、

奈緒「あ、もしもし。絵里？あのさ、さっき
のグアムなんだけど、やっぱ行けるかも」

奥からスーツ姿の拓也が出てきて、ガ
ラスケース越しに奈緒の背後に立つ。

奈緒「大丈夫大丈夫、今から臨時収入、入る
から。このネックレス、ティファニーのだ
から、10万は固いと思う」

奈緒、拓也の方をゆっくり向きながら、

奈緒「え、何の事かわかんない？だよ。実

はさ、元カレに貰ったネックレス、今か
ら売っ払っ……たっくん！」

拓也の顔を見て叫ぶ奈緒。

拓也「いらっしやいませ」

奈緒「な……何やってんの？」

拓也「仕事です」

奈緒「え、新しく決まった仕事って……嘘で
しょ？えくなんかあれだね。運命だね」

拓也「お売りしたいのはそちらのネックレス

でよろしいですか？」

奈緒「あ、はい。そうです」

×

×

×

査定スペースで向き合う奈緒と拓也。

拓也はループでネックレスを見ている。

奈緒「たつくん違うの。さっきね、こないだ

表参道で会った高校の同級生から電話き

て、今度の連休グアム行こうって誘われた

の。でも私いまお金ないから一回は断った

んだけど、たまたまこのお店の前通りかか

って、ああそうだ。たつくんに貰ったティ

ファニーのネックレスがあるって思って」

拓也「どこも違ってなかったよ」

奈緒「でも本当に一回は断ったんだよ。でも、

マジでたまったまこの店があったから……」

店員Bがコーヒーを持って来て、奈緒

の前に置く。

奈緒「今でも、そのネックレスは私達の愛の

証……あ、ミルクもう一つもらえますか？」

拓也、店員Bを手で制し、

拓也「良いです。持ってこなくて」

奈緒「あ、いや、私甘いコーヒー好きなんで。

ミルクお願いします」

拓也「本当持ってこなくていいです。もう終わるんで。ていうか、ほぼ終わってるんで」

奈緒「あ、この人私と付き合ってたんですけ

ど、なんか昔からこういうところあって」

拓也「それももう終わってるんで！全部終わった話なんで本当大丈夫です」

困惑した表情で立ち去る店員B。

奈緒「ミルクひとつでそんな声荒げるなんて。

たっくん、なんか変わっちゃったね……」

電卓の画面を奈緒に突きつける拓也。

画面に『1000』と表示。

奈緒「一、十、百、千……千？なにこれ」

拓也「千円です」

奈緒「千円？何が」

拓也「このネックレスが」

拓也、ネックレスを奈緒の顔に近づけ、

拓也「イミテーションだよ。しかもかなりのの

粗悪品。よく見ろ、ティファニーの『i』が『e』になってるだろ」

目を細めてネックレスを見る奈緒。

ティファニーの刻印の『i』が『e』になっている。

奈緒「テ……テファニー？」

拓也「ま、最初からわかってたけどな」

奈緒「だってこれたつくんが買ったんでしょ」

拓也「そう、ネット通販で三千元。すぐ気づくと思ってシャレで渡したら、滅茶苦茶テンション上がったから言えなくてさ。そろそろネタバラシして、本当のプレゼント渡そうってタイミングでお前の浮気だよ」

奈緒「ひどい。ひどいよたつくん。このネックレス、二人の愛の証でしょ？千円で売れる訳ないじゃん」

拓也「1300円」

奈緒「え？」

拓也「箱付きだったら1300円」

奈緒「……1500！」

拓也「……じゃあ1500円」

奈緒「よし売った！じゃあ箱取ってくるね。

そこにいてね、たつくん」

立ち去る奈緒を呆れ顔で見送る拓也。

拓也「なんなんだよ……」

店員Bがミルクを持って戻ってくる。

店員B「あ、元カノさん、もう帰っちゃったんですか」

拓也「ええ。昔っから、いつつもこうやって振り回されて。でも……何か憎めないんですよね。アイツ」

走って戻ってくる奈緒。

奈緒「たつくん、因みになんだけど本当のプレゼントって何くれるつもりだったの？」

拓也「え？本物のティアニーのネックレスだよ」

奈緒「そうだったんだ……たつくん、私さ。

実は今でもたつくんの事」

拓也「帰れ！」

立ち上がり、出口を指差す拓也。

